

鹿ヶ谷事件以後の平重盛の政治的地位について

有 田 志穂子

はじめに

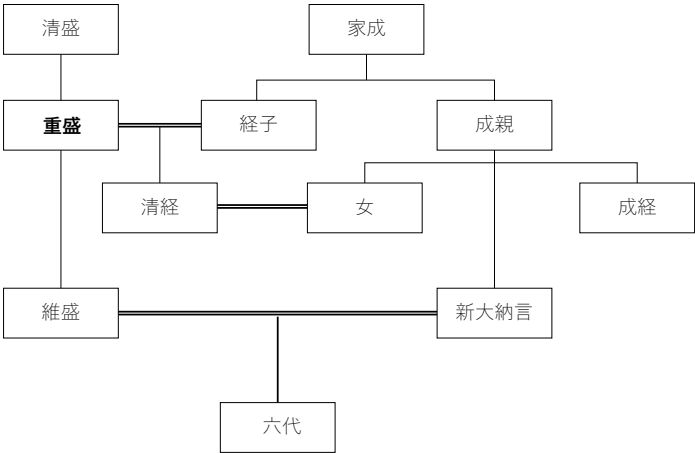
本論文は、鹿ヶ谷事件以後の平重盛の政治的地位について、その姻戚関係から検討を加えるものである。重盛は清盛正室時子の生まれではなく、後白河院の近臣である藤原成親の同母妹を正室としていた（系図1）（系図2）。重盛の立場について語られるとき、多くは院近臣成親との結合と、一門内で台頭していた時子系統からの疎外に注目される。義兄成親が父清盛によって排除された鹿ヶ谷事件にいたるまでの重盛の政治的立場の変遷や、成親との結合の実態については、元木泰雄氏による詳細な研究がある。¹それによれば、重盛は保元・平治の乱への参戦や清盛が有していた軍事警察権の継承によって清盛後継者の地位を確立し、後白河院政の支柱となっていた近臣成親と幾重もの姻戚関係を結ぶことで自身も院近臣としての政治基盤を築いていた。一方で、平家一門内では時子の妹である

建春門院を母に持つ高倉天皇の即位や、続く時子所生徳子の入内によって時子系統の権威が上昇した。それにより時子の第一子である宗盛が政界に台頭し、時子と血縁関係を持たない重盛は一門内において立場を後退させていく。そして安元二年（一一七六）に平家と後白河の協調関係を仲介していた建春門院が没し、翌治承元年、鹿ヶ谷事件において成親ら院近臣が清盛によって処刑されると、後白河と清盛の協調は決裂、重盛も立場を低落させると説明しておられ、これが通説となっている。

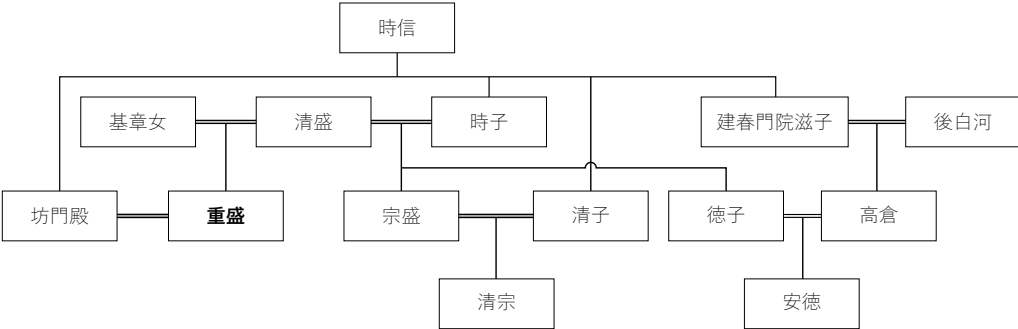
鹿ヶ谷事件から死没までの約二年間、重盛の地位は事件に連動して失墜したものとされ、その動向について検討された研究はほとんど見られない。治承二年の高倉中宮徳子の皇子出産は時子系統を平家嫡流と決定づけた出来事として解釈されるが、重盛は清盛に代わる平家の代表として入内時から徳子を猶子としており、出産諸行事においても養父としての務めを果たしている。さらに注目すべきは、

系図 1 重盛と成親の系統

天皇家と平家の結合の象徴となるこうした重大イベントにおいて確認される重盛妻「坊門殿」が、時子の姉妹であったとみられることである。つまり、重盛は成親の一門だけではなく時子系統とも姻戚関係を結んでいたのであり、この関係を考慮に入れて重盛の政治的地位について改めて確認していく。



系図 2 重盛と建春門院・時子系統



第一節 事件以前の重盛の地位

(一) 徳子入内と「女房坊門殿」

承安元年（一一七一）、時子所生の清盛長女・徳子が女御として高倉天皇に入内することが決まった。建春門院を母にもつ高倉の即位（仁安三年・一一六八）に続く徳子の入内によって、平家と後白河は政治的結束をさらに強めることとなる。

一二月二日に女御入内雜事定が行われ、入内の諸事は待賢門院璋子が鳥羽天皇に入内した永久五年（一一一七）の例に倣うとされた。徳子は入内にあたって従三位に叙され、待賢門院が白河院の養女として入内したことを先例として後白河の猶子となり、同時に重盛の猶子ともされた。^②このとき、徳子の実父清盛は既に出家した身であつたため、重盛が清盛に代わり徳子の父役、そして一門の家長役を務めて入内を後見したのである。入内の二か月前にあたる一〇月二三日、後白河は建春門院とともに清盛の福原別業に臨幸しており、角田文衛氏はこのさいに徳子の入内について正式な決定が下された^③と推測される。また、福原から帰った三日後には後白河が近日重盛の六波羅第に行幸するという噂が立つており、高橋昌明氏はこれを入内の詳細を重盛と定めるためであつたとされる。^④重盛は前年に権大納言を辞していたが、徳子入内の直前にあたる一二月八日の秋除目にて復官した。^⑤

元木氏は、入内にさいして重盛が徳子の養父と定められたことについて、時子系統の上昇により重盛の立場が動揺することを前提に「重盛を高倉の王権と結合させ、その不満を緩和させようとする方

策」であつたと説明される。^⑥後白河と平家との協調関係において時子と建春門院の姉妹関係が重要な役割を果たしたことは疑いようもない。しかし重盛はもともと高倉の乳父であつたし、^⑦皇太子時代は東宮大夫を務めていた。表向き政界を引退している清盛に代わり一門の代表を務めていた重盛が徳子の養父に選ばれるのは当然のことといえよう。重盛と高倉や時子との関係を形式的に取り繕つたものとみる必要はない。鍵となるのは、時子の妹にあたる重盛の妻の存在であつた。徳子の入内にさいして、時子・建春門院の姉妹にあたる平時信女が重盛妻（妾）として奉仕しているのである。重盛は時子系統との繋がりにとづいて徳子の入内に奉仕したと考えるのが穏当である。

以下は一二月一四日、入内当日の記事である。徳子は母時子とともに法住寺御所に入り、建春門院の手で着蒙の儀が行われた。夜になつて大内裏へ移動する。傍線部にある重盛妻の記述に注目したい。

史料①『兵範記』承安元年一二月一四日条（◇内は細字双行、傍線は筆者）

（前略）入^レ夜糸毛車轡^三南階^三、剋限出御、在憲朝臣奉^三仕反問^一云々、於^二六条河原邊^一見物、此間明月光明、白沙如^レ晝、法皇并女院於^二七条殿棧敷^一有^二御見物^一、（中略）主上入^レ御夜御殿^一之後、権大納言重盛卿取^二御草鞋^一給^レ預^レ之、三品昇御之後、同卿□取^二御衾^一、此間公卿着^二饗座^一有^二盃酌事^一云々、御車後乗^二女房坊門殿^一、（贈左府御女、新大納言室）（後略）

徳子は糸毛車に乗って刻限に法住寺御所を出た。記主平信範は六条河原のあたりで行列を見物した。澄んだ月が光輝き昼のように明朗な晩で、後白河と建春門院は七条殿の棧敷より行列を見守っていた。高倉天皇が夜御殿に渡御すると、重盛が高倉の草鞋を預かった。徳子入室の後も重盛が夜具の支度をしている。

このとき、「御車後」として徳子の糸毛車に同乗していたのが「女房坊門殿（贈左府御女、新大納言室）」である。ここにおける「新大納言」について、『大日本史料』¹⁰は藤原実国と比定する。確かに兼実はこれに近い時期に実国を「新大納言」と称しているが、ここでは重盛と考えるのが妥当である。その判断の決め手となる記述が「贈左府御女」だ。建春門院の父である平時信は高倉天皇の外祖父として仁安三年に正二位・左大臣を追贈されていた。¹¹『尊卑分脉』において、時信女の夫たちの中で承安元年時に大納言の地位についていたことがわかるのは平重盛だけである。この「女房坊門殿」こそが本論文での鍵を握る建春門院や時子・時忠の妹で重盛の妻となっていた女性である。

京樂真帆子氏によると、牛車の同乗は人々の親密さを示し、外部へのアピールとして「人間関係を演出し公開するツールでもあった」という。¹²これは徳子の入内においても同様のことが指摘できよう。徳子の入内は時子系統の権威を上昇させることに繋がる。その場において徳子の糸毛車に「坊門殿」が同乗し、双方の親密さが示された。時子系統に連なる両者だが、そこには徳子の養父かつ「坊門殿」の夫である重盛の存在が感じられる。つまり、血縁上時子との関係が希薄な重盛は徳子や「坊門殿」を通して自身が時子系統と密接に

結合していることを人々にアピールしたのである。参考のために、仁安元年（一一六六）、のちの高倉天皇である憲仁親王が立太子したさいの事情を紹介する。法住寺殿から東三條殿に移動する憲仁の「檳榔総唐車」には、高倉の乳母を務めていた重盛正室経子（成親妹）が同乗した。¹³高倉の立太子においては経子と高倉の親密さが示され、ひいては重盛が平家の代表として高倉を後見していること、ともに高倉を支持する平家と後白河の關係が親密であることが演出されたのだ。重盛は後白河院と建春門院、双方に繋がる姻戚關係を持ち、それらを連立させていたことがわかる。

時子系統の権威を上昇させる徳子の入内において、重盛は時子の姉妹である自身の妻「坊門殿」を徳子のごく近くに控えさせることにより、自身の立場の安定を内外に主張したのである。徳子の入内によって重盛が時子系統から疎外されるようになった、と考える必要はないということがわかる。

時信女である「坊門殿」は史料①に示した『兵範記』の一所のみに登場する名称であり、次に同一人物の存在が確認できるのは七年後の徳子懷妊時と、史料から得られる彼女の情報は少ない。生母や生年といった出自は不明である。重盛との婚姻時期も判然とせず、子女の存在は確認できない。しかし二人が徳子の入内以前に婚姻關係を築いていたことは確かであり、そこに時子の仲介があったことも蓋然性があると考えて良い。繰り返しになるが、重盛は平氏の家嫡でありながら一門で主流をなしていた時子の生まれではない。栗山圭子氏が説明されるように、父親の長子である「父太郎」と母親の長子である「母太郎」の並立は「家」の分裂解体の危険性をはら

んでおり、義母と継子の関係強化は「家」の維持と繁栄のために果たすべき課題であった。¹⁶ 重盛と「坊門殿」との婚姻はそうした危機への対処であったと考えて無理がない。ところで、この「坊門殿」は「女房」とあるものの『建春門院中納言日記（たまきはる）』や『建礼門院右京大夫集』には同僚の女房としてその名がみえない。あるいは後白河に仕えていた女房であったからなのかもしれない。「坊門殿」と重盛との婚姻は、清盛や時子のみならず、後白河も関与していた可能性も考えられよう。

重盛の異母弟、時子所生の第一子宗盛もまた、時信女を自身の妻としていた。宗盛にとつて叔母にあたる女性であるが、名を清子といい、建春門院と母と考えられている。¹⁷ 宗盛と清子の婚姻は高倉即位後の嘉応元年（一一六九）初頭であったと考えられる。¹⁸ 元木氏はこの婚姻について「時子や建春門院には、宗盛を重盛に対抗させ、さらには彼に代わる嫡男の座を目指そうとする意図があった¹⁹」とされる。しかし、すでに述べた「坊門殿」の存在を考えれば、時子に一門・姉妹の分裂を招くような嫡男交代の野望があったと断じることは難しいように思われる。時子も重盛の家嫡としての立場を容認しており、重盛が棟梁となったのちも自身や実子の立場が安定するよう配慮していたという高松百香氏のご指摘が妥当であろう。ただし、清子は高倉践祚後に清盛の猶子となり典侍に任じられ、即位後には乳母の旁で正五位下に叙された女性である。²¹ 重盛の妻で清子と同様に高倉の乳母となっていたのは先述した正室経子であり、兄・成親の失脚後も重盛正室の座は経子にあった。重盛は正室としての経子の地位を保つ一方で、時子系統との繋がりをもつ「坊

門殿」を妻として平家一門の権威を示す場に奉仕させている。つまり、重盛は成親との関係を放棄することなく時子系統との結合を果たし、連立する政治的基盤を得ていたのだ。徳子養父の立場と「坊門殿」との婚姻によって重盛は時子系統に組み込まれ、家嫡の立場を強めたことになる。これらが重盛のみならず清盛や時子の意向であったことには疑問の余地がない。

元木氏は徳子入内によって時子系統が上昇し重盛の立場は後退するとしううえで、承安年間に重盛は巻き返しを図ったと説明された。²² しかしこれらは、徳子の入内で重盛の立場にむしろ安定がもたらされたことの結果ではないかと考えられる。承安元年までに「坊門殿」を娶り徳子の養父となることで時子との結びつきを強め、その後成親一門との関係をも強固にしたという次第になる。重盛のさらなる躍進と捉えられるだろう。

元木氏は、重盛の「巻き返し」のなかで後白河最大の近臣である藤原成親との連携を強化したことを指摘しておられる。重盛が成親の妹経子を嫡室としていたことは先述の通りであるが、さらに長男維盛と三男清経の妻にもそれぞれ成親の女を迎えた。『平家物語』によると維盛と成親女との長男・六代の誕生は承安三年（一一七三）であるため、二人の婚姻は承安元年か二年頃であると考えられる。この維盛妻となった成親女は、『建春門院中納言日記』によると筆者の姪で、新大納言と称される。十二、三歳のころから二、三年間建春門院に仕え、「御所近き局給はりて、限りなくもてなさせ給ひき²⁴」と建春門院に大変近い女房であったことが記されている。成親の女であり建春門院女房であった新大納言と維盛との婚姻は、

重盛にとって院近臣たる成親との結合と建春門院に繋がる時子系統との結合の双方を強めるものとなっただろう。清経妻となった成親女についての詳細は確認できないが、清経の母は成親同母妹経子であるから、こちらもさらなる成親との結合の強化ととれよう。

同様に、重盛息維盛は平親宗の女も妻に迎えていた。親宗は時子や時忠、建春門院と同じ時信の子である。『尊卑分脈』によると母は大膳大夫藤原家範の女で、時子も同母とされるが、同時代史料に基づけば時子は時忠と同母であり、親宗の母は家範の息基隆女と考えられる⁽²⁵⁾。血縁関係においては建春門院・時子系統にごく近い人物であったが、政治的立場としては平家よりも後白河に近く、院近臣として活躍した⁽²⁷⁾。この親宗女も新中納言と称された建春門院の女房であった。成親との関係と同様に、重盛は婚姻によって後白河院近臣である親宗と結合し、一方で、建春門院や時子系統とも繋がり強め、その連立によって政治的地位を築いていたと言えよう。平家一門内部での立場を安定させると同時に、近臣や女房との婚姻関係を通して天皇家との関係をも深めていったのである。

(二) 任大臣と大饗

承安四年（一一七四）七月八日、臨時除目があり重盛が右大將に任じられた。これには、病によって右大將を辞した源雅通の後任として権大納言重盛と権中納言藤原兼雅の二人の候補のうちどちらが任官するか取り沙汰されていたが、「禪門（清盛）之心」⁽²⁸⁾によって重盛が選ばれたという経緯があった。重盛の右大將任官は清盛ですら経験していない、平家一門で初めて到達した地位であった。元

木氏によると、この時期の近衛大將は大臣に次ぐ地位と評価されており、大納言で大將を兼ねることは大臣昇進の前提とされていた⁽²⁹⁾。大將任官は院近臣層にとって大臣昇進の壁の突破口であり、多くの人から望まれる地位であった。平家は重盛の右大將任官によって大將家の家格を築いたのである。二二日の拝賀では、邦綱以下公卿一〇人、殿上人二七人が扈從した。重盛は清盛に次いで大臣に昇進することを裏付けられたのであり、これは平家一門が大臣家となることを意味していた。翌承安五年六月には、内大臣人事について後白河が重盛の昇進を図っているという噂が流れた⁽³⁰⁾。重盛が公的に平家の代表として認識され、父清盛からも後白河からも信頼を得ていたことがわかる。

そののち、安元二年（一一七六）に平家と後白河の關係を取り次ぎ、後白河の院政を安定させるとともに平家の榮達に力添えをしてきた建春門院が没した。清盛と後白河の結節点であった彼女の死は、両者の關係瓦解の大きなきっかけの一つと考えられている。しかしその翌年正月二五日、前日に延引されていた除目入眼がにわかに決行され、右大將重盛が左大將に、宗盛が右大將に任じられた。宗盛は前年の建春門院崩御によって官位を返上していたが、この前日に還任している⁽³¹⁾。『玉葉』には宗盛を右大將に任命するために後白河が左大將藤原師長に辞状を提出するよう命じたと記されている⁽³²⁾。嫡流としての重盛は徳子入内に向けた還任以降順調に昇進を重ねており、宗盛は重盛に雁行する形で右大將に拔擢されたのである。こうして重盛・宗盛が兄弟で左右大將の座を占めることとなった。兄弟で左右大將に任じられるのは摂関家以外では初めてのことであつ

た。つまり、兄弟両大将就任によって平家は摂関家に匹敵する權威を獲得したのである。これを強いて兄弟の対立・競争とみる必要はないのではなからうか。

さらに三月には重盛が師長の後任として内大臣に任ぜられた。父清盛に次ぐ父子二代での大臣昇進である。元木氏によると「内大臣・左大將は（中略）摂関家嫡男に匹敵する地位」であり、重盛がこの地位について、重盛を平家後継者にすることでその武力を自身に従属させたい後白河の意向を想定しながら「平氏一門の後継者が彼以外にいないことを明示するもの」と述べておられる。⁽³⁴⁾ 寵臣成親との繋がりを有している重盛は、後白河にとって疑いもなく平家の後継者と目されていたのである。元木氏が指摘しておられるように、このとき重盛とともに宗盛や知盛も昇進しており、そこに清盛の後白河への働きかけがあったことは想定できる。強引な要請で軋轢を生んだ可能性も否定できないが、結果として平家は建春門院没後に家格を上昇させることに成功しているのである。このことから、後白河と清盛の協調関係は軋轢を生みながらもまだ双方に継続する意志があったとみた方が自然であろう。

前田英之氏によると、平家が大臣家の家格を獲得することは、清盛後継者としての重盛の課題であった。⁽³⁵⁾ 内大臣就任にあたって、清盛の先例に倣い兼宣旨と大饗は不要とされたが、重盛は大饗の実施を強く希望しそれを実現させている。⁽³⁶⁾ 清盛が内大臣・太政大臣任官のさいに大饗を催さなかった理由の一つとして、大將任官経験がないことがあげられる。⁽³⁷⁾ また清盛の大臣昇進は公卿引退を前提としていたため、「太政官官人との序列を確認する行事であった大

饗を催す必要はない」と考えられたという。⁽³⁸⁾ こうした清盛の特殊な例と違い、重盛は左右大將を経験した末に大臣に昇進したのであり、引退を前提とした任官ではなかった。前田氏は重盛が平家の家格を摂家に次ぐ清華の家として確立させる役割を負っていたとし、そのために通例として任大臣節会とセットで催される大饗の実施が欠かせないものであったと指摘しておられる。⁽³⁹⁾ 重盛にとって、大臣昇進の大饗を催すことは清盛後継者として平家の家格の上昇を世間に示す重要な意味を含んでいたのである。さらに注目すべきは、これが平氏と後白河の政治的連携の支柱である建春門院を喪ったのちの出来事であったことだろう。高倉の猶子問題や藏人頭任官問題を⁽⁴⁰⁾ 経て徐々に後白河との蜜月に翳りをみせていた平家にとって、重盛の内大臣昇進の大饗は、建春門院没後も平家の権勢が変わらぬことを主張する場であったといえよう。

第二節 鹿ヶ谷事件以後の重盛

(一) 鹿ヶ谷事件

建春門院の死後、清盛と後白河の間には意見の相違がありながらも互いの努力によって協調関係が維持されていたといえる。その中で重盛は、後白河に嫡流の立場を支持され左大將・内大臣に任じられることによって平家の大臣家としての家格を確立し、変わらぬ権勢を示した。しかし平家と院近臣の対立は深まり、ついに清盛と後白河との軋轢が表出し、重盛に衝撃を与える事件が勃発する。いわゆる「鹿ヶ谷事件」である。

建春門院の諒闇が明けようとしていた安元三年(一一七七) 六月一日、清盛は突如として後白河院近臣である西光と藤原成親を捕縛し、西光の首を刎ね、成親を備前国に流した。西光は後白河の乳父であった信西の乳母子で、成親とともに「上皇恩寵之輩」であった。清盛の突然の暴挙の背景には「鹿ヶ谷の陰謀」があったとされるが、平氏打倒の謀議や多田行綱の密告は實在性が疑われており、史実と虚構の区分についてさまざまな意見が出されている。これについては川合康氏が研究史を踏まえて詳細な検討を加えておられる。⁽⁴³⁾

重盛にとって、父清盛による義兄成親の処刑は寝耳に水であっただろう。六月一日には配流先でまだ存命である成親に重盛が衣類等をひそかに送っているという話が出ている。⁽⁴⁴⁾ 成親が捕縛されたさい、重盛は父清盛に成親の身の保証を請うている。『愚管抄』においては、おりしも清盛邸に居合わせた重盛が成親の捕らえられている部屋に行き「コノタビモ御命バカリノ事ハ申候ハンズルゾ」⁽⁴⁵⁾と伝えたところ。成親の突然の捕縛・配流に対し、重盛が妹婿としてできる限りの配慮を加えたことが察せられよう。重盛は成親が配流された六月三日には左大将辞状の準備をしており、五日に自身の長子で成親の娘婿であった維盛を中使として辞状を提出していた。⁽⁴⁶⁾ しかし「コノタビモ」とあるように、成親は平治の乱でも重盛のとりなしによって赦免されたと伝えられる人である。⁽⁴⁷⁾ 繰り返される成親の反発を清盛は許さなかつたらしい。重盛の懇願のおかげか斬首は免れ備前国に配流された成親であったが、結局はその地で殺害された。⁽⁴⁸⁾

清盛にとっても、成親は婚姻関係を幾重にも重ねた繋がり深い

人物であった。しかしその成親は、平家の目覚ましい上昇の中で自身も後白河の寵臣として昇進を重ね、嘉応の強訴においてはその存在が泥沼化を招き、鹿ヶ谷事件の直前まで問題となっていた安元の強訴においては公卿の意見を見無視した後白河の行動を支持し、さらには清盛殺害計画に関与した。⁽⁴⁹⁾ 二度の強訴からわかるように、重盛率いる平家の武力が後白河の權威に依拠している以上、平家は成親ら院近臣が起こしたトラブルに否応なく巻き込まれるのである。

清盛と成親らとの対立の中で重盛がどのような立場に立たされたのかは大きな問題である。しかし、先行研究では、「坊門殿」を紹介する重盛と時子らとの関係が考慮されていない。

元木氏は、成親が後白河を操り、重盛と後白河を結合させ、一門分裂の原因を作った張本人であったと述べられる。氏によれば、重盛は高倉天皇につながる時子系統の台頭に不満を募らせ、高倉の排除を目指す後白河や成親との連携を強化していたため、清盛が死去すれば重盛と宗盛以下時子系統との分裂は不可避であった。鹿ヶ谷事件には一門分裂を阻止するというもうひとつの目的があったと指摘される。⁽⁵⁰⁾ 美川圭氏は清盛の疑いの目は重盛にも向けられた可能性があるとし、後白河に親しい重盛が平家の分裂を画策し父清盛に弓引く事態も想定可能であったと述べておられる。⁽⁵¹⁾

しかしながら、これまで述べてきたように、重盛は「坊門殿」を通して時子系統とも結合し、嫡流の地位を固めており、平家を率いる立場にあった。その重盛が一門分裂の意志を抱いていたとは考え難い。しかし重盛は成親との結合によって後白河に直接つながる院近臣的性格をも有していたため、清盛の院近臣排除という一門分裂

回避法は重盛の地位の低下をも招くはずである。そうした行動をとるながらも清盛はこれから述べるように鹿ヶ谷事件以後も重盛の嫡流の立場を支持していたように見える。清盛の真意はわかりかねるが、清盛が成親殺害に踏み切った背景として、重盛の政治的基盤が成親のみに依存せず「坊門殿」を通した時子系統にもあったことが大きな意味を持つだろう。成親の排除によって、重盛は改めて時子系統に組み込まれることとなったと位置付けられる。

清盛は事件後まもなく福原に帰っており、⁽⁵⁴⁾のちの治承三年政変のように後白河の院政停止には及んでいない。しかし互いの努力によって建春門院死後も維持されていた協調関係はついに崩壊し、春秋二季准恒例であった後白河による福原御幸もこれ以後行われなくなった。⁽⁵⁵⁾事件による成親の排除と、清盛と後白河との決別によって、重盛は平家一門内において立場の後退を余儀なくされるといわれる。たしかに鹿ヶ谷事件は時子系統の筆頭である宗盛の立場にダメージを与えるものではなかったし、この時期、宗盛は右大将として天皇の石清水行幸の供奉や後白河の御供を務め、自身の養女（藤原隆房女）と藤原兼実の息良通との婚姻を画策するなど、徐々にその存在を強めていた。⁽⁵⁶⁾一方で重盛は鹿ヶ谷事件の直後に左大将を辞しているが、平家が大名家となったことの象徴である内大臣は現任であった。同年一月三日に行われた五節帳台において重盛は宗盛・時忠とともに出仕しており、一九日には五節舞姫の装束を沙汰して送っているし、⁽⁵⁷⁾年が明けて治承二年（一一七八）正月元日の小朝拝、四日の朝覲行幸にもその名がみえるのである。宗盛は朝覲行幸の賞で正二位に昇進するが、翌五日の叙位では重盛四男有盛が中宮御給

で正五位下に叙された。この有盛の母は成親の同母妹である重盛正室経子である。また御遊においては重盛長子維盛が笛を、二男資盛が箏を担当している。宗盛の政界への台頭は無視できず、宗盛に比して重盛が以前ほど特別な働きをしていないことも確かである。しかしこの時点において重盛が内大臣としての務めを果たしていること、子息らの活動が見られることは、重盛父子がまだ政治的地位を失っていないことの証左となろう。

このころ後白河は、来たる二月一日に園城寺において前権僧正公頭を大阿闍梨として秘密伝法灌頂を授かることを予定していたが、これを知り妬んだ延暦寺が園城寺を焼き討ちせんと蜂起した。⁽⁵⁸⁾後白河はまたも延暦寺と対立することとなったのである。正月二〇日、「事已火急之由」を聞いた後白河は安元の強訴と同様に清盛を福原から勅喚しようとしたが、清盛は応じなかった。⁽⁵⁹⁾このとき後白河の御使として摂津福原亭に赴いていたのは宗盛であった。鹿ヶ谷事件を経験してもなお後白河は武力を平家に頼らざるを得なかったが、清盛は依然として延暦寺と事を構えようとはしなかったのである。注目されるのは、平家への武力要請において後白河が重盛ではなく直接清盛を頼っており、その使を務めたのが宗盛であったということである。この騒動において重盛の関与はみられない。これについて元木氏は重盛が軍事的な面でも地位を低下させており、宗盛が平家を代表する立場を得たとされる。⁽⁶⁰⁾軍事動員や清盛との交渉において重盛は除外されたのである。先の比叡山に対する武力攻撃の要請において重盛・宗盛が清盛に従属する態度を見せたため、⁽⁶¹⁾後白河は清盛に直接交渉するのが手っ取り早いと考えたのだろう。

宗盛を使に立てたことについては、鹿ヶ谷事件による成親の失脚・殺害から、このとき父清盛に対する交渉力は重盛より宗盛の方が優れていたと捉えるほかない。一方で、宗盛が福原から帰京した翌二三日に行われた法住寺院御所における尊勝陀羅尼供養には「内大臣已下公卿七八人」と重盛の参仕が確認できる。事件以後重盛の立場が動揺したことは否定できないが、重盛と後白河の信頼関係が破綻していたとも考え難いのである。二月七日、清盛の消極的な姿勢と延暦寺の抵抗によってついには後白河は灌頂を断念するに至った。⁽⁴⁾

後白河が園城寺での灌頂を断念した翌日にあたる二月八日、重盛は内大臣の辞状を提出した。五ヶ月前の左大將辞任時と同様に、辞表の草稿は前式部少輔藤原敦綱が、清書は権右中弁親宗が担当した。異なるのは中使で、維盛に代わって今度は経子所生の清経が立てられている。通常、一度目の上表は承認されずに返遣され、三度上表してはじめて辞職が認められる。重盛の辞表もすぐ返されるはずのものであったが、返遣という形の引き留めもなく、しかし辞職の承認もされず、以後四ヶ月ものあいだ放置されることとなる。前節で、重盛の大臣昇進は平家を大臣家の家格に押し上げるための必須課題であり、重盛自身も大臣家の家格を示すことにこだわっていたことを示した。一門の嫡流たる重盛にとって内大臣の座は容易に返上できるものではなかっただろう。重盛の上表は認められていないにも関わらず、二月二〇日には重盛の後任として宗盛を大納言の後内大臣に任ずるのではないかという噂が流れている。⁽⁵⁾もちろん専制的な清盛への皮肉が込められた噂であろうが、重盛の努力が実つ

たと言ふべきか、このとき平家は既に大臣家としてみなされていたようだ。さらに周囲は内大臣交代が重盛から宗盛への嫡流の交代をも意味すると予想しただろう。しかし上表は放置という形をとられた。高倉やその背後の後白河にとっても扱いの難しい案件であったことが察せられよう。

(二) 徳子懷妊と「彼御方」

同年五月二四日、中宮権大夫時忠が高倉天皇に中宮徳子の懷妊がほぼ確実であることを報告した。⁽⁶⁾徳子の入内から七年、初めての懷妊である。一月一二日、誕生したのは平家にとって悲願といえる皇子であった。皇子はすぐに立太子され、三歳で即位した。安徳天皇である。先行研究では、徳子の懷妊・皇子出産は重盛にとつて「決定的な打撃」であり、時子系統が嫡流、重盛系統が傍流となることを決定づけるものとされる。しかしそれは、重盛と時子系統との姻戚関係を考慮していない立場からの見方である。実際には、鹿ヶ谷事件以後不安定な立場にいた重盛にとつて、徳子の懷妊はむしろ奇貨であったことを指摘したい。それは重盛妻「坊門殿」、宗盛正室清子の存在をみていくことで明らかになるのである。

史料②『山槐記』治承二年六月一〇日条

(前略)今夜内大臣(重盛)表被_レ返遣、(去春上表也)中使左少將清経朝臣、(内府息也、内々可_レ用)清経之由被_レ申云々、為_レ清家儀_一歟、(中略)而中宮有_二御懷妊事_一、内府有_二父子之儀_一、以_二前官_一供奉吉事、若有_二思慮_一歟、

内大臣を上表してから四ヶ月が経った六月十日、重盛の辞表が返却された。中使は上表時と同じ重盛息清経で、これは重盛の内々の希望だったようだ。中宮徳子の懐妊にあたって、徳子と「父子の儀」がある重盛は内大臣職にあつてその出産に仕えたほうがよいと考えられたと想像される。つまり重盛は徳子の懐妊をきっかけに内大臣の辞表を取り下げたことになる。失意の中で左大将・内大臣を辞したと思われる重盛だが、徳子の懐妊を受けて再度低下していた地位の挽回を果たす。重盛は入内に続き今回も徳子の養父を務め、一門中最も熱心に出産関連の諸行事の差配にあたつた。また徳子の御産所となつたのは重盛が清盛から受け継いでいた六波羅泉殿である。それだけでなく、諸行事においては重盛と時子系統の結合を象徴する「坊門殿」の奉仕が多く見られるのである。前章で述べたように、徳子入内時における重盛は養父の立場と「坊門殿」との婚姻、二つの要素によって自身の家嫡の地位の確たることを内外に示した。成親という重盛の政治的基盤の片方を失った今、「坊門殿」を通した時子系統との繋がりは徳子入内時以上に大きな意味を持つ。重盛は徳子懐妊をきっかけに時子系統との結合を強調し、再度嫡流の立場に返り咲いたのである。それには皇子出産を見込んで関係修復を考え始めた清盛や後白河の意向も関わっていただろう。

徳子の懐妊発覚後、六月二日に清盛が福原から上洛し、翌日後白河院を訪ねている。一七日には御産御祈のため厳島に奉幣使が派遣され、二八日に懐妊五ヶ月として着帯の儀が執り行われた。着帯の儀では養父たる重盛のほか藤原隆季（中宮大夫）、藤原邦綱（乳母の父）、時子、時忠、知盛、維盛など、中宮職や血縁などで徳子に

繋がる面々が出席した。儀式に用いる帯を準備したのは宗盛であり、宗盛とその正室清子は帯を献上したのちに遅れて参入している。

史料③『山槐記』 治承二年六月二十八日条

（前略）主上（御引直衣）渡御、（密儀、女房候「御共」）（中略）中将局開「御衣宮」退、母儀「二品、彼御方、（二品弟、内府妾也）」右大将北方、（二品弟）皆出「障子外」、主上令「奉結」「御帯」給、主上令「坐」宮御左方「給、（求）男之人其夫居」左、求「女之人居」右云々、取「御帯」、二倍（六尺也、爾天）、「自」御小袖左方「袖引入テ、御後方ヲ引廻テ、諸輪奈被」奉「結」云々、（後略）

高倉が御引直衣を着し女房を連れて内密に閑院に渡御すると、傍線部の「彼御方」、つまり時子の妹である重盛の妻（「坊門殿」）は、姉妹である徳子の「母儀」「二品」時子や「右大将北方」清子とともに室外に出た。高倉は男児誕生を願って徳子の左側に座り、帯を取って諸輪奈に結んだという。この記述からは、着帯が始まる直前まで、建春門院とも連なる時子・「彼御方」（「坊門殿」）・清子の三姉妹が徳子のそばに控えていたことがわかる。

宗盛正室清子は高倉の即位後にその乳母とされたが、今回の徳子の出産においても赤子の乳母となることが予定されていた。しかし着帯の儀を終えた閏六月一日、清子は重篤の「二禁」（腫物）を煩う。清子は灸治を承引せず、状態が悪化して数日後の一五日に出家。七月一六日、ついに皇子の誕生を迎えることなく息を引き取

った。宗盛は清子の病を理由に七月一〇日に右大将を辞しており、清子の死後は服喪によつて徳子の出産諸行事から離脱することとなる。宗盛が沙汰していた御産御祈は母時子が引き継いだ。⁽⁸⁸⁾ 鹿ヶ谷事件以後自身の立場を動揺させつつあった重盛に対し着々と政界に台頭していた宗盛は、徳子の出産においても乳母となる妻とともに奉仕していたが、その清子の死は宗盛の台頭を失速させる大きな出来事であった。宗盛にとつて大きな痛手であり、またそれが坊門殿の活躍や重盛の復権を導いたといえよう。

着帯において徳子の母時子・赤子の乳母清子と並んで徳子に伺候したのが徳子の養父重盛の妻「彼御方」であった。徳子の叔母、つまり時子の姉妹であり重盛の妻という肩書からして、これは『兵範記』の「坊門殿」と同一人物とみて問題なからう。彼女は重盛と並び御産御祈を多く沙汰したことが確認できる。着帯の儀と同日に開始された徳子主宰の御産御祈では阿梨底母供、十五童子供の雑事の沙汰を重盛とともに担当している。九月二〇日にも重盛が白河殿盛子や頼盛・教盛らと分担して五壇法を沙汰するとともに、「坊門殿」もまた藤原隆房（清盛娘婿）や藤原季能（重盛同母弟基盛の娘婿）らと修法四壇を沙汰していることがわかる。また、一〇月二一日に催された御仏供養においても「為女御「彼御方沙汰之」とある。この「彼御方」には重盛妻や建春門院妹といった説明が付されていないが、『山槐記』において重盛妻が一貫して「彼御方」と記されていることを踏まえれば、これも「坊門殿」と同一人物であろう。「坊門殿」が重盛妻や時子妹として、すなわち平家の一員として徳子出産の諸行事に多く関わることは、重盛の養父の立場を時子

系統を軸とした一門と安定して結び付けていた。

『山槐記』における「彼御方」表記について、佐伯真一氏は「×の御方」といった呼称はその人が夫の生活圏内において地位が高くなかったことを示すとされ、「彼御方」もこれに依じて時子や建春門院、清子らに比べて地位が低かったことを指摘しておられる。⁽⁸⁹⁾ 氏のいうように『山槐記』においてはたびたび「彼御方」とみえるが、前に示した『兵範記』の一度の登場においては「女房坊門殿」と呼称されていることに注意したい。しかしたとえ重盛と「彼御方」の婚姻が形式的で「彼御方」の地位が低かったとしても、時子や建春門院に連なる女性が重盛妻という立場で徳子の入内行事に最も近く奉仕することに意味があったのである。

一〇月二七日、中宮徳子に陣痛の兆候があり「聊有御気色」として公卿・侍臣らが六波羅泉殿に多く集まった。清盛も参入し、また後白河も密々に御幸している。この日は出産に及ばなかったが、重盛は等身六観音像の造立とその供養を、時忠は五大尊の供養を催し、また後白河院も等身不動・大威徳像を造らせて翌日にそれ供養した。⁽⁹⁰⁾ 高橋氏は「後白河が沙汰したのは薬師法一回のみと、醒めた感情を示している」とするが、清盛と決別したはずの後白河も徳子出産にはそれなりに想いを寄せていたようにみえる。

十一月二日、徳子はいよいよ皇子を出産した。『山槐記』同日条をみると、皇子は「未二點」（一三時頃）に誕生し、雑事の勘文を受けて同刻「御乳付并切臍緒」があったことがわかる。臍の緒は清子に代わり乳母となった時忠の妻、洞院局が練糸で結び、重盛が竹製の刀を用いて切った。その後洞院局が皇子の口内を拭き、綿

でいくつかの薬を含ませたのち乳を含ませ（洞院局は六月に出産していたがこの時乳は出なかつたらしい）、時子の家女房によって乳付がされた。重盛が徳子の父として平家の中で最も皇子に近い立場にいたことがわかる。「御乳付并切（臍緒）」は母親の父たる重盛と赤子の乳母洞院局によって行われているが、さらに読み進めると、その乳母と並んで皇子の面倒をみる「彼御方」すなわち「坊門殿」の存在が現れるのである。

史料④『山槐記』治承二年十一月二日条

〔前略〕皇子入御帳中、〈所立母屋西一間之白御帳也、自北方入御〉、彼御方〈故建春門院御弟、即又中宮外姨母也〉、奉抱之即還御、〈須御坐帳中、然而近代之法異上古儀、南面風寒、似無其便〉、如奉臥即還御云々、只随時宜也、御帳間北並戸内為御所也、彼御方洞院局被候御傍云々、（後略）

乳付ののち皇子は「帳中」に入御するが、すぐに「御帳間北並戸内」の御所に戻る。そのとき皇子を抱きかかえていたのが「故建春門院御弟、即又中宮外姨母」の「彼御方」、つまり重盛の妻「坊門殿」であった。御所に戻ったのちも彼女は洞院局とともに皇子のそばに候じている。「坊門殿」が清子や洞院局のような乳母であったという記述はないが、養父重盛の妻として、建春門院の妹として、中宮徳子の叔母として、彼女が皇子の乳母に準ずる重要な立場におかれていたことがわかる。時子妹で宗盛室であった清子に代わり、時忠

の妻である洞院局が乳母に選出されたことから、一門にとって念願であった徳子の出産において時子系統の奉仕が重視されていたことが察せられる。ここに、徳子の養父たる重盛の妻として、正室経子ではなく時子系統の「坊門殿」が奉仕したことの意味が見いだされよう。鹿ヶ谷事件によって政治的支柱の片方であった成親を失い微妙な立場に立たされていた重盛は、徳子の出産に「坊門殿」を自身の妻として多く出仕させることで、時子系統との強固な繋がりを再度内外に示すことに成功したのである。入内に続き、自身が養父を務め主導する徳子出産諸行事において、重盛は「坊門殿」の存在により時子系統との結合を深めた。その一方で、重盛の正室は鹿ヶ谷事件以後も一貫して経子であり続けた。重盛は事件後も成親との関係を放棄せず、その家を救済する責任をも負っていたのである。

皇子の誕生から間もない十一月二八日、院前に召された藤原兼実は後白河から急遽立太子の意を示され、二歳や三歳で立太子を行った先例が良くないため年内に行いたいがどうかであるか関白基房と相談するように、と命じられた。「入道相国一昨夕俄上洛、依此事云々」とあるように清盛が二六日に福原から上洛し皇子の立太子を要請したのだという。基房との相談の結果、二歳や三歳は不吉であるが四歳まで待つのは遅い、突然のことではあるが年内に遂行するのがよいということになった。⁷⁶ 一二月二日、皇子の剃髪祝いに重盛が奉仕している。清盛の代理ではありながら、徳子の父・一門の代表者としての堂々たる奉仕である。同日、宗盛は室清子の所悩により辞していた右大将に復帰している。⁷⁸ 八日にはさっそく親王宣下が行われ、皇子に言仁の名字が与えられた。言仁親王勅別当

には宗盛が、家司には重衡・藤原経房・資盛が、職事には清経・藤原光雅・藤原光長が選ばれている。

一五日、中宮御所である重盛の六波羅泉殿で立太子の儀が行われた。⁸⁶⁾同時に坊官除目が行われ、東宮傳に左大臣経宗、東宮大夫に宗盛、権大夫に藤原兼雅・亮に重衡・権亮に維盛が任じられた。東宮傳の人事について、世間では高倉東宮時代に傳を務めていた兼実が任じられると噂されており、清盛も兼実を推したが、後白河が重盛の補任を望み、しかし重盛は辞退して自身の代わりに経宗を推薦したために経宗に定まったという。⁸⁷⁾経宗は重盛妻経子・息宗実を猶子としており、平家の中でも特に重盛と関係を深く持つ親平家公卿であった。二八日、東宮言仁が入内し、勸賞によって維盛が正四位下に、源資時と清経が従四位上に、資盛が従四位下に叙された。⁸⁸⁾維盛・清経・資盛という重盛息三兄弟の昇叙からも、重盛が徳子出産によって嫡流の立場を失っていないことがわかるだろう。年が明けて治承三年（一一七九）正月六日に東宮御五十日の儀、二月二日には御百日の儀が催された。⁸⁹⁾このころ宗盛は正月に東宮大夫を、二月二六日に権大納言と右大将を辞任しているが、これは前年の室清子の死によるものだと考えられている。⁹⁰⁾言仁親王はこのち治承四年に高倉天皇のあとをうけ踐祚・即位し、安徳天皇となる。

一連の諸行事によって嫡流の立場を回復させていた重盛であったが、すでに体調は悪化しており、三月一日に再度内大臣上表の意志を見せた。⁹¹⁾重盛はこの日に平野行幸の御祈禱奉幣使の発遣があったために上表を延引し、五日には高倉の院御所七条殿での方違に随

行したことがわかる。⁹²⁾日を改めて二一日、重盛は内大臣の辞表を提出した。今度の辞表も作者・清書者は同じで、使は二男資盛であった。藏人頭源通親が重盛に対し天皇に辞職が認められれば勅答があるはずだと伝えると、重盛は今日は夕方から熊野精進を始めるため勅答を受けることができない、承認があれば後日勅答を受けようと答えたという。⁹³⁾今回の上表はこのち無事に認められたようである。五月二五日、重盛はついに出家した。

史料⑤『山槐記』治承三年五月二五日条

（前略）前内大臣正二位平重盛（年四十二）依病出家、へ于時嚴親入道太政大臣見存、日来不食云々、去二月東宮御百日出仕、其後籠居、三月被_レ參「熊野」□申「後世事」云々、於「精進屋」食事、頗復例之間、反_二吐血_一、其後又不食、逐日枯槁云々、（後略）

重盛は前々から食欲がなく、二月の東宮御百日の儀に出仕したのち籠居していた。三月に熊野に参詣して「後世事」を祈願し、精進屋の食事によってかなりよくなったはずが吐血し、再び食欲を失い、日を追って衰弱していたという。重盛が不調の中で徳子養父の務めを果たし、御百日の儀まで見守ったのちに内大臣の辞表を提出して出家に至ったことがわかる。前年二月の上表もあるいは不調によるものであったかもしれない。重盛がもはや長くないことを受けてか、六月四日には経子を母に持つ重盛の三男清経に禁色が許された。⁹⁴⁾長男維盛は清経よりも位階が上でありながらまだ禁色は許されてお

らず、このことから重盛が鹿ヶ谷事件以後も経子の嫡室としての權威を守り続けたことがわかる。重盛は出家のちも回復せず、体調が悪化していた。六月二〇日には一時氣絶状態にあったことが知らされ、翌二日には後白河が方違のため宇治に御幸する予定を延引して密々に重盛の小松亭に臨幸している^⑩。後白河の重盛への変わらぬ親愛が察せられる。七月二〇日に危篤状態となり、二九日明け方、ついに重盛は父清盛に先立ち息を引き取った^⑪。

重盛は清盛の嫡子でありながら時子所生でない出自や、院近臣成親との係累によって、平家一門における立場を繰り返し動揺させることになるが、自身の懸命な働きと天皇家や時子系統につながる「坊門殿」との婚姻によって政治的基盤を連立させ清盛後継者としての地位を守り固めてきた。しかし父清盛から平家棟梁の座を完全に譲り受ける前に死去してしまい、その息らはまだ若年であった。これにより、次第に正統な清盛後継者の地位は時子系統である異母弟宗盛に移行していくのである。

おわりに

本論文では平時信女「坊門殿」に注目し、重盛は鹿ヶ谷事件による盟友成親の失脚後も自身の政治的地位を保ち続けていたことを指摘した。天皇家と平家との結合を強化する徳子の高倉入内や皇子出産時において、重盛が養父として活躍するとともにその妻「坊門殿」も重要な役を務めていることから、重盛が時子系統の權威の上昇によって疎外されたわけではなかったことがわかる。つまり重盛は自

身の政治的基盤を成親のみならず時子系統にもまたがって展開しており、それにより立場を安定させたのである。重盛の政治的地位は鹿ヶ谷事件以後も清盛や時子、後白河から支持され続け、清盛と後白河の結節点の役割を果たしていた。

平家と後白河は建春門院の死と鹿ヶ谷事件を契機に関係が決裂し治承三年政変に至るとされるが、以上のことを踏まえると、その決裂時期は重盛の没後までくだるのではないだろうか。治承三年政変への過程を含め、両者の関係性の変化の時期については、再検討の余地があることを述べて結びとする。

註

- (1) 元木泰雄「藤原成親と平氏」『立命館文学』六〇五、二〇〇八年、「平重盛論」(臚谷壽・山中章編『平安京とその時代』思文閣出版、二〇〇九年)。
- (2) 『玉葉』承安元年二月二日条、『兵範記』同日条。
- (3) 『玉葉』承安元年一〇月二三日条。
- (4) 角田文衛「建春門院」『後白河院―動乱期の天皇―』吉川弘文館、一九九三年。
- (5) 『玉葉』承安元年一月四日条。
- (6) 高橋昌明「平清盛 福原の夢」講談社、二〇〇七年。
- (7) 『公卿補任』嘉応二年、同三年。以下、重盛の官歴については『公卿補任』による。
- (8) 前掲注(1) 元木論文二〇〇九年、二四二頁。
- (9) 『兵範記』仁安二年一〇月一〇日条、仁安三年二月一日条。

重盛正室経子は高倉の乳母を務めている。

(10) 『大日本史料』三編之一八、四二四頁。

(11) 『玉葉』承安二年正月一九日条。

(12) 『増補改訂 兵範記人名索引』（兵範記輪読会編、思文閣出版、二〇一三年）においてもこの「新大納言」は重盛と比定されている。

(13) 『兵範記』仁安三年六月二九日条。

(14) 京樂真帆子「牛車で行こう！平安貴族と乗り物文化」第五章、吉川弘文館、二〇一七年。

(15) 『愚昧記』仁安元年一〇月一〇日条。

(16) 栗山圭子「池禪尼と二位尼―平家の後家たち―」三一九頁（元木泰雄編『保元・平治の乱と平氏の栄華』清文堂出版、二〇一四年）。

(17) 佐伯真一「アノ御方」小考、『延慶本平家物語考証三』新典社、一九九四年。

(18) 『兵範記』嘉応元年四月二三日条に初めて「典侍宰相中将（宗盛）室家也」とある。

(19) 元木泰雄『平清盛と後白河院』一一六頁、角川書店、二〇一二年。

(20) 高松百香「平時子―「平家」を作り上げ、終わらせた清盛の正妻―」（服藤早苗編『「平家物語」の時代を生きた女性たち』小径社、二〇一三年）。

(21) 『兵範記』仁安三年三月一日条、同年一二月四日条。

(22) 前掲注（1）元木論文、二〇〇九年、二四四頁。

(23) 『平家物語』長門本卷第一九「六代御前事」「（前略）十六と申年の文治四年の春のころ（後略）」とある。

(24) 新日本古典文学大系「たまきはる」二五八頁「女房の名寄せ」

(25) 『吉記』治承五年五月二八日条。

(26) 中村文「平親宗伝―その伝記並びに〈大井川行樂和歌〉について―」『立教大学日本文学』五四、一九八五年。

(27) 伊藤瑠美「白河―後鳥羽院政期の院近臣に関する一考察」四頁（阿部猛編『中世政治史の研究』日本史料研究会企画部、二〇一〇年）、前掲注（22）中村論文。

(28) 『玉葉』承安元年七月九日条。重盛の右大將任官について、曾我良成氏は清盛のはたらきかけがあったことを前提としつつあくまで主導していたのは後白河であったことを強調している。『物語がつくった驕れる平家』臨川書店、二〇一七年。）

(29) 元木泰雄『平清盛の闘い 幻の中世国家』（文庫、角川書店、二〇一一年、一〇四頁）。

(30) 『玉葉』承安五年六月一〇日条。

(31) 『公卿補任』安元三年条。

(32) 『玉葉』安元三年正月二五日条。

(33) 前掲注（1）元木論文二〇〇九年。

(34) 同右。

(35) 重盛・宗盛の左右大將就任と同時に知盛は中将のまま従三位に叙された。これは前年一二月に院近臣藤原光能が上臈である知盛を超越して藏人頭に補されたこと（『玉葉』安元二年（一一七六）二月五日条）の代替と考えられている。（五味文彦『平清盛』（八

- 物叢書」吉川弘文館、一九九九年。
- (36) 前田英之「平重盛と朝廷儀礼」『梅花女子大学文化表現学部紀要』一二、二〇一六年。
- (37) 『愚昧記』治承元年二月一〇日条。
- (38) 『百練抄』仁安二年二月一日条。
- (39) 前掲注(36) 前田論文、五一頁。
- (40) 同右。
- (41) 建春門院死没の三ヶ月後、後白河の第八・第九皇子がひそかに閑院内裏に参上し、高倉の猶子となった(『玉葉』安元二年一〇月二三日条、同二九日条、一一月二日条)。高倉にはまだ皇子がいなかったことから、これは高倉の皇嗣の準備であったと指摘される。(前掲注(19)(29) 元木著書)、藏人任官問題については注(35)。
- (42) 『百練抄』治承元年六月一日条。
- (43) 川合康「鹿ヶ谷事件」考」『立命館文学』六二四、二〇一二年。
- (44) 『玉葉』治承元年六月一日条。
- (45) 『愚管抄』巻第五 高倉。
- (46) 『愚昧記』治承元年六月五日条。
- (47) 『平家物語』長門本巻第一 成親謀叛事。
- (48) 『顕広王記』では「艱難之責」によって七月九日に死去とあり、『公卿補任』では七月二三日、『愚管抄』では日付は不明ながら七日ばかり絶食させたのち強い酒を飲ませて殺害したとある。
- (49) 詳細は前掲注(1) 元木論文、二〇〇八年。
- (50) 前掲注(19) 元木著書。
- (51) 美川圭「後白河院―日本第一の犬天狗―」ミネルヴァ書房、二〇一五年。
- (52) 前掲川合注(43) 論文五二六頁による。『愚管抄』巻第五「高倉」に「サテヤガテ福原へ下リニケリ」とあり、『顕広王記』治承元年六月二三日条に「今日丹波少将向福原云々」とありこの時点で清盛は福原に帰っていたと推測している。
- (53) 前掲注(6) 高橋著書。
- (54) 『玉葉』治承二年一〇月五日条・九月一四日条・一〇月一日条。
- (55) 『玉葉』治承元年一〇月三日条、同一九日条。
- (56) 『玉葉』治承二年正月二〇日条、『山槐記』同日条においては二月一日に平等院に御幸し、一〇日に園城寺にて灌頂を受けるとされる。
- (57) 『山槐記』治承元年正月二一日条。
- (58) 前掲注(19) 元木著書。
- (59) 『顕広王記』治承元年五月二四日条。
- (60) 『玉葉』治承二年正月二三日条。
- (61) 『玉葉』治承二年二月七日条。
- (62) 前掲注(6) 高橋著書、一七七頁。
- (63) 『玉葉』治承二年正月二〇日条。
- (64) 『山槐記』治承二年五月二四日条。
- (65) 前掲注(19) 元木著書、一六五頁。
- (66) 『御産部類記下』「安徳天皇」『山槐記』治承二年七月二八日条逸文。

- (67) 『玉葉』 治承二年閏六月一〇日条。
 (68) 『山槐記』 治承二年七月一八日条 (『御産部類記』 所収)。
 (69) 『兵範記』 の入内時における記事 (史料①) では重盛室とされたが『山槐記』では妾とされる。
 (70) 『山槐記』 治承二年六月二八日条。
 (71) 『山槐記』 治承二年九月二〇日条 (『御産部類記』 所収)。
 (72) 『山槐記』 治承二年一〇月二一日条。
 (73) 前掲注 (17) 佐伯論文。
 (74) 『山槐記』 治承二年一〇月二七日条、二八日条 (『御産部類記』 所収)。
 (75) 前掲注 (6) 高橋著書、一七八頁。
 (76) 『玉葉』 治承二年一月二八日条。
 (77) 『玉葉』 治承二年二月二日条。
 (78) 『公卿補任』 治承二年条。
 (79) 『玉葉』 治承二年二月八日条。
 (80) 『玉葉』 治承二年二月二五日条。
 (81) 『玉葉』 治承二年二月六日条。
 (82) 『顯広王記』 同日条では「平清宗〈左大將息〉」とある。清宗といえは宗盛の息であるが、『公卿補任』 治承四年条によると清宗は治承三年に従四位下に叙されており、治承二年時点では正五位下であったことがわかる。また、当時重盛は左大將を辞しており現任は藤原実定であったが、ここでは前年まで左大將を務めていた重盛のこととして、「清宗」は清経の誤りであると考えて良いだろう。

- (83) 『顯広王記』 治承二年二月二八日条。
 (84) 『玉葉』 治承三年正月六日条、二月二二日条。
 (85) 『公卿補任』 『玉葉』 治承三年二月二六日条。
 (86) 前掲注 (19) 元木著書。
 (87) 『山槐記』 治承三年三月一日条。
 (88) 『山槐記』 治承三年三月六日条。
 (89) 『山槐記』 治承三年三月一日条。
 (90) 『山槐記』 治承三年六月四日条。
 (91) 『山槐記』 治承三年六月二〇日条、二二日条。
 (92) 『玉葉』 治承三年七月二〇日条。
 (93) 『玉葉』 治承三年七月二九日条。「今曉入道内府薨去云々、或説去夜云々、」また、『公卿補任』 治承三年平重盛項では「八月一日薨」とされる。
- なお、本論文において古記録は『兵範記』は『増補史料大成』を、『山槐記』は『増補史料大成』『圖書寮叢刊御産部類記』を、『玉葉』は『圖書寮叢刊九条家本』を、『吉記』は『新訂吉記』を、『愚昧記』は『大日本古記録』を、『顯広王記』は高橋昌明・樋口健太郎「国立歴史民俗博物館所蔵『顯広王記』承安四年・安元二年・安元三年・治承二年卷」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第一五三集)を、『愚昧記』は『大日本古記録』を、『百練抄』は『新訂増補国史大系』を用いた。文学系は『愚管抄』は『日本古典文学大系』を、『建礼門院右京大夫集』は『新編日本古典文学全集』を、『たまきはる』は『新日本古典文学大系』を、『平家物語』は『国書刊行会刊行書』を

用いた。『公卿補任』『尊卑分脈』は『新訂増補国史大系』による。

〔付記〕 本稿は、二〇二〇年二月に学習院大学文学部史学科に提出した卒業論文の一部を加筆修正したものである。